

■ 第10回「小樽港フィールド・ラーニング」(O.F.L.)の開催 ～北海道築港史―廣井勇と北海道開拓～

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

小樽港は日本近代築港の原点であり、将来の人口や地域の生産量の予測に基づく移出量の推定、他のインフラ整備に呼応した投資の必要性などの計画的観点、耐海水性コンクリートの製作、波に粘り強い防波堤構造などの技術的観点は、今なお港湾整備の根幹です。

このため、小樽築港事務所初代所長である廣井勇博士による工学の考え方と人間廣井勇を育てた時代背景及び歴史的史実等を学ぶことにより、港湾技術者としての意識、技術、知識、港湾を含む社会資本整備の計画及び説明力等の技術力向上を図ることを目的に「小樽港フィールド・ラーニング」を開催しております。

「小樽港フィールド・ラーニング」は、小樽港(Otaru)で実物を見ながら(Field)、習得(Learning)との意味で平成23年度から開催、7月17日に第10回を開催、北海道開発局職員、建設会社、コンサルタントなどの関係者約60人が参加しました。

平成28年の第6回から、日本データサービス(株)(7月17日当時)顧問・北海学園大学院非常勤講師の関口信一郎氏により「北海道開発の歴史～廣井勇博士の生涯」をテーマに連続シリーズとして開催しております。今回は「北海道築港史―廣井勇と北海道開拓」と題し、北海道における近代築港学の発展と我が国の近代港湾工学の確立・発展への貢献についてご講演いただきました。

講演は、「廣井勇博士が完全に移植した近代築港学は、小樽港北防波堤の建設以後、北海道開拓に不可欠な港の計画および建設に理論的・実務的基礎を与え事業を牽引して十分な成果を収めていきました。それと同時に近代築港学そのものも種々な自然条件の現場で展開されることにより発展していきました。全国の港湾工事においても、小樽港北防波堤建設以後に外洋に臨んで新たに港湾を計画し建設していったフィールドは、ほとんどが北海道です。実務を行ったのは廣井博士の教え子たちであり、常に顧問としての廣井博士の指導がありました。したがって北海道の築港を語ることは近代築港学の発展過程を語ることでもあります。その築港の進展が、とりもなおさず我が国の近代港湾工学の確立・発展に貢献したとみて誤りありません。北海道命名150年を迎えた今日、上記の観点から北海道開拓における築港の歴史を述べることは意義があることと考えます」との内容で、北海道内の各港における廣井勇博士の功績についてまとめていただきました。

なお、第11回を今年11月頃に開催を予定しております。

